

論文

越境する運動と変容する主体

——ジャテックの脱走兵支援運動・米軍解体運動を中心に——

大野光明*

1. はじめに

1960年代後半、日本のみならず世界各国において、反差別、大学闘争、住民運動、公害反対など、様々な異議申し立ての運動が行われた。その1つの大きな潮流はベトナム戦争への反対運動であった。日本におけるベトナム反戦運動の大きな流れを作ったのがベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）である。また、ベ平連の活動の中から生まれ、ベトナム戦争に反対する脱走兵を匿い国外に脱出させる運動や米兵の反戦運動の支援などに取り組んだのがジャテック（反戦脱走米兵援助日本技術委員会）である¹。

近年、ベ平連やジャテックについて、当事者の回想や総括²だけでなく、その活動についての体系的・実証的な研究の成果³が出てきている。道場親信は「ベトナム反戦運動に取り組む中で、「反戦平和」の運動・思想は大きくパラダイム・チェンジすることになった」と評価している（道場、2005：438-439）。それは、次のような特徴による。第1の特徴は、「組織ではなく運動体である」という原理を掲げ（吉川、1969：17-18）、「ふつうの市民」というアクターを登場させ、誰もがいつでも自由に出入りできる運動と場をつくった点である。第2には、自分たちが加害者としても被害者としても戦争に関わらざるを得ない点を発見し、戦争への関与を絶えず強いてくる社会構造そのものを変革していく、という視点を持つにいたった、その反戦のアプローチの広がりである。そして第3に、ベ平連やジャテックに集まった人々が、コミュニケーションや場の創造に意識的・無意識的に力点を置いた点である。ベ平連は、それぞれの参加者が個人として行動し、意見を交換し合い、直接・間接の「共感」や「共鳴」が生み出されていくような「気持ちのいいフォーラム」（吉川、1991：105）、「新しい型のコミュニケーションを作り出す運動」（古山、1968：119）であった。ベ平連やジャテックの運動の過程で、人々はコンフリクトを孕みながらも、国境を越えた連携を生み出すようなコミュニケーションの場をつくっていった。

ベ平連やジャテックによる国境を越えた運動の展開について、たとえば道場は次のように評価している。

しばしばアメリカと同時に集会・デモなどの行動を組んだり、「日米市民会議」と題されたシンポジウムを行ったりと、ベトナム戦争の当事国であるアメリカの反戦市民運動との連携を大切にた。また、アメリカの新聞に対して全面意見広告を打ち、ベトナム戦争反対を訴えた。ここには、「市民」の国境を越えた連携によって国家権力・国家原理を超えることが目論まれていた。小田実はこれを「普遍原理」と呼び、鶴見良行は国民としての立場の否定を唱えた […]。（道場、2005：447-448）⁴

しかし、国境を越えた連携を目指した運動は、日米市民間で主に取り組みされた国際会議や同時集会・デモのようなイベントのみにとどまらなかった。国境の向こうの海外の運動やフェンスの向こうの米兵の運動との連携、そして脱走兵の国外脱出への支援などの「越境」する運動を生み出していった。先行研究では、「国境を越えた連携」という運動経験について、具体的な海外の活動家や米兵と直接生身で接する経験をまとめ、分析する中で、「国境を越える」ことがどのように人々によって経験されたのかは十分検討されているとは言い難い。

このような問題意識のもと、本稿では、ジャテックを中心とした脱走兵支援運動や米軍解体運動において、国境

キーワード：ジャテック、越境、ベトナム戦争、脱走、米軍解体運動

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2005年度入学 公共領域

と基地のフェンスを越える運動がどのように展開され、人々が「越境」をどのように経験したのかを検討する。なお、本稿では紙幅の問題から、脱走兵や米兵の側が運動の場で何を経験していったのかは別稿に機会を改め検討の対象としない。主に日本（人）の運動の経験に限定して検討をすることとしたい。

2. ジャテックの脱走兵支援運動と米軍解体運動

2-1 ベ平連と加害者・被害者論

ベトナム戦争は、1964年8月トンキン湾事件、1965年2月の米軍による北ベトナム爆撃（北爆）開始により本格化し、1973年3月の米軍撤退完了、1975年4月サイゴン陥落まで続いた冷戦下でも最も激しい「熱戦」の1つであった。

日本はベトナム戦争の遂行のため重要な役割を担っていた。日本政府は、日米安全保障条約の対象である「極東」の範囲を広げ、アメリカの軍事戦略を支持・協力する姿勢を明確にしていた。日本・沖縄の米軍基地はベトナムへの出撃、補給、修理、訓練、情報、通信、医療、休養、慰安の機能を持っていた。軍事施設や軍隊が日本人の日常生活に深く入り込み、米兵と日本人との出会いが日常的にあったのである。日本各地の日常生活の場が「基地化」しているかのような実感を人々がはつきりと抱くほどに、米軍とその基地は日本と沖縄をベトナム戦争へと直接・間接につなげていた。

北爆開始後の1965年4月、小さなデモからベ平連は始まった。ベ平連は運動開始当初は「ベトナム人がかわいそう」、「ベトナム戦争に反対」という素朴な共感や同情によって人々が参加するものであった。しかし、戦況の悪化や世界各国の反戦運動の成長や広がりを受けとめるなかで、日米安保体制の廃棄や在日米軍や自衛隊への反対運動などを具体的な目標とし、社会全体の変革を提起していく。

ベ平連に参加する人々の戦争観と運動に参加する理由に大きな影響を与えていたのは、小田実の「被害者・加害者」論である（小田、1966=1974：109-110）。小田はベトナム戦争に「日本人民」の生活が加担している加害の側面と、「日本人民」の生活が日米両政府によって戦争への加担を強いられる被害の側面との両方を明らかにした。そして、加害者・被害者の両方の立場から、戦争への加担を強いてくる国家と自らとを断ち切っていくことが必要であると、切断の寄りどころとして、アメリカの活動家との交流を通じて学んだ国家に対する市民的不服従の原理を提起する（小田、1966=1974）。たとえ国家が強いてくる命令であっても、戦争に反対するためであれば不服従の姿勢で望み、抵抗を試みることを提起したのである。この思想は後述するようにジャテックという場で取り組まれた様々な運動において、米兵との連帯の文脈で応用される。

2-2 米兵向けの働きかけの開始

1966年8月、ベ平連主催の「ベトナムに平和を！日米市民会議」では、兵士向けの働きかけが提案されている。そして、1966年12月10日、横須賀基地ゲート前で英文リーフレットが配られ始めたのが、ベ平連による米軍兵士に対する初めての反戦の働きかけであった。そのリーフレットの内容は「1、上官や大統領に戦争反対の手紙を書くこと、2、兵舎のなかで集会を開きまた大衆的な運動に参加すること、3、サボタージュすること、4、脱走すること、5、良心的兵役拒否をすること」を米兵に提案するものであった（関谷、1998：35-36）。ほとんどの参加者にとって、米兵との直接コミュニケーションは初めての経験であり、興奮を伴う経験であった。

なぜ、ベ平連は脱走を呼びかけ、支持・支援したのか。ベ平連の結成に関わり、ベ平連・ジャテックともに積極的に活動を行った作家・小中陽太郎は、脱走兵が生まれることで、兵士が減り、戦意が低下し、ベトナム戦争を遂行するにあたって重要な保養地としての日本の役割を失わせる効果があると述べた（小中、1968：191）。しかし、このような運動の実務的なインパクトだけではなく、脱走兵や米兵に共鳴する経験が、運動への参加と継続を担保していた。この点については後述する。

2-3 ジャテック第1期⁵と脱走兵支援運動

1967年、実際に脱走兵が現われることで、脱走兵支援運動の取り組みが生まれた。韓国軍を脱走、大村入国者収

容所に拘禁された金東希、米国陸軍兵士・金鎮洙の存在が公になり、ベ平連は支援運動を行う。そして、1967年10月、横須賀に停泊中の米軍空母イントレピッド号から4人の米兵を匿い、11月にソ連への脱走の成功（その後、脱走兵の受入を行っていたスウェーデンに到着し、脱走兵は生活を開始）を公表し、以降、脱走兵支援運動が本格的に取り組みられることになる。イントレピッド号からの4人の脱走兵への支援をきっかけに、以下の目的から「イントレピッド4人」の会が鈴木道彦、高橋武智、福富節男の呼びかけでつくられた。

- 1、4人の行為とその意義を国内外に広く宣伝、普及する。
- 2、政治的亡命の権利についての世論を喚起し、政府にこれを認めるよう要求する。
- 3、ベトナム侵略戦争に反対する兵士の行動を支持する。
- 4、4人の行動を支持し、かつ今後にそなえるため募金し、また寄付を集める。

（高橋、2007b：139-140）

「イントレピッド4人」の会は、世間の表舞台に立ち、『脱走兵通信』の発行を含めた脱走兵支援運動についての広報・宣伝活動と資金集めを行った。その裏で、脱走兵の脱走成功に向けた地道な活動を専門に担うことを目的につくられたのがジャテック⁶であった。脱走兵を匿う「人民の海」（学生や女性の参加が多かった）と呼ばれる有象無象の人々が、受入可否の検討、脱走兵の移動、宿泊場所の確保・提供、出国などの活動を個々に担い、脱走兵をリレーしていき、脱走を目指す運動である（高橋、1998：113-114）⁷。1967年10月から翌年11月まで、ジャテックは立て続けに17名をソ連経由でスウェーデンに脱走させることに成功した。

米兵の脱走の理由は様々であった。戦地での悲惨な経験、大義無き戦争への非難、上官への反発、軍隊内の人種差別とベトナム人への連帯意識などが複雑に絡まりあっている。脱走に対するアメリカの法律による刑罰は非常に重いものであった。脱走の罪は、不名誉除隊、給料の没収、5年以下の重労働の刑に処されるケースが多かった（関谷・坂元、2000：544）。不名誉除隊となれば、投票権や保険加入権の剥奪、自動車運転の禁止、パスポート発行停止などの措置がなされ、一般社会から「第2級市民」扱いを受けることとなる（清水・古山・和田、1970）。それでも決断された脱走であった。

しかしながら、1968年11月にスパイの侵入により脱走兵の居場所がばれ、国外脱出直前の米兵が北海道で逮捕される。逮捕事件後、ソ連を経由するルートが閉ざされる。警察・公安・米軍による弾圧を免れるためメンバーの刷新をし、第2期ジャテックが高橋武智を中心に立ち上げられた。

2-4 ジャテックの方針転換と米軍解体運動の開始

ジャテック第2期は、脱走ルートの新規開拓に努力する一方で、以下のような課題に直面し、方針転換を行うことになる。第1に、脱走ルートが無い中、無期限長期に渡って脱走兵を匿い続けることが求められる一方で、脱走兵の数は増え続けたため、脱走兵を新たに受け入れることが困難になったことである（高橋、1998：115）また、第2に、在日米軍内部での米兵自身による反戦運動が盛り上がりを見せ、基地内の抵抗が広がりつつあった。この動きに呼応するように、ジャテックは基地の外から米兵への支援運動を行うようになった点である。第3に、合法的な除隊手続の可能性が広がったことである。1969年8月以降、アメリカの徴兵忌避者の救援センター活動に取り組んでいたヤン・イークスや兵士へのカウンセリング活動に取り組んできたPCS（パシフィック・カウンセリング・サービス）のメンバーが来日し、合法的な除隊手続の説明やアドバイスを含むカウンセリングを始めた。ジャテックは、このような国外からの運動の支援を受けて、脱走やAWOL（無許可離隊）とは別の異議申し立ての方法を米兵に提案できるようになっていったのである。

そのため、第2期ジャテック（～1974年頃）は新たな脱走ルートを探しながらも、脱走兵を匿う運動を必要最小限にとどめるという方針へ転換する。そして、各地のベ平連や反基地市民運動との連携を図り、基地内の米兵の活動を支援しながら、米軍解体運動——米軍の戦争遂行機能を破壊し、米軍基地を無くしていくための「兵役拒否、脱走、反戦・反軍新聞発行、兵士組合活動、基地内および前線での抗命、営倉や基地での反乱その他——これら相互に結びついた」運動（清水・古山・和田、1970：11）——に取り組み始める（本野、1998a）。米軍解体運動

の特徴は、米兵への直接行動、働きかけ、呼びかけを公の場で行ない、米兵とのコンフリクトを伴うコミュニケーションや交流の場を作る試みであった点である。前述のカウンセリング活動以外の主な活動は次のとおりである。

①反戦GI新聞の発行支援・配布

戦争に反対する兵士の間でつくられた反戦の行動や主張を載せたGI向けの新聞である。海外では1967年～68年にかけて発行され始めている。日本ではヨーロッパを中心に作られていた『We Got the brASS』を参考にして、そのアジア版がジャテックの日本人グループと在日アメリカ人と在日米軍人有志の協力で1969年9月上旬に創刊される。ベ平連を含む各地の反戦グループの手によって全国の米軍基地周辺で配られ、5000～6000部が米兵の手に渡ったと言われている（「ベトナムに平和を！」市民連合、1974：189-197）。また『We Got the brASS』に触発されて、全国の米軍基地ごとに反戦GI新聞が発刊された。日本で作られた反戦新聞が沖縄、韓国、タイ、ベトナムへも渡っていたといわれている（清水・古山・和田、1970：211-212）。さらに、「一旦新聞が発行されると基地内の抵抗はいっそう促進され、これに軍当局が襲いかかる、抵抗の輪がひろがる、外部の反戦・平和勢力との共闘が形づくられるというように発展していく」（藤枝、1970：120）というように、新聞を通じて基地内外の人々がフェンスを越えて交わり、新聞が抵抗運動を促進するメディアとして作用していた。

②反戦放送の実施

朝霞反戦放送局をはじめとして、米軍基地にむかって直接反戦を呼びかける、各地の反戦放送運動の試みがあった。東京・練馬と埼玉県に跨る朝霞米軍病院の傍らで朝霞反戦放送局を開いたのは「大泉市民の集い」である。「大泉市民の集い」はベ平連やジャテックと密接な連携を図りながら運動を行った市民団体である（「大泉市民の集い」30年の会編、1998）。朝霞米軍病院への抗議行動や反戦運動の過程で、「基地撤去を目的としている運動の対象になる米軍兵士に声と音で直接に訴え、兵士の気持ちをゆさぶり、考え行動するキッカケをかれらのなかに作りだしていこう」と考えるようになったという（清水・古山・和田、1970：198-199）。そこで、反戦放送を1969年6月から開始した。テープにアピールメッセージ、歌（フォークソングやR&Bなど）、脱走兵や反戦GIからのメッセージなどを取り込み、基地のフェンス近くで病棟に向けて流し、米兵との対話を試みた。反戦放送局の試みはベ平連などによって、横浜の岸根や山口県・岩国基地へもひろがり、米兵への直接行動の代表的な活動となった。

③米軍基地への抗議デモや基地機能を止める直接行動

1970年代前半、横田基地や立川基地などへのユニークな直接行動（デモや集会）が行われている。たとえば非暴力直接行動の「ピープルズ・テクノロジー」と称して、軍用機の離発着をタコ上げや風船で妨害し、実際に止めてしまうこともあった。また、基地周辺での座り込みや色鮮やかなデモなどを、時には米兵の参加も得ながら行った。直接行動に参加した人々は、「戦争機械を止める」ことを目的に成長し活発化してきていた基地内での反戦兵士の運動と、連携を求めながら運動を展開した（ベ平連、1993：419；ベ平連、1993：511；ベ平連、1993：522）。また米兵とのロックコンサートや「ラブイン」と呼ばれるフリーパーティーなどの催しも全国で行われ、顔を合わせた交流がなされてもいる。

④反戦コーヒーショップ（喫茶店）の開店・営業

基地の中の米兵と、外の人々との出会いや交流の場として、反戦コーヒーショップの試みがある。例えば1972年2月に山口県・岩国では「ほびっと」が京都などからの若者たちによって開かれた。「“ロックを聴いて、米軍基地を吹っ飛ばせ!”というスローガンで「GI JOIN US”（アメリカ兵よ、ほくらとともに）のさらなる拡大と強化」と「基地の内のGIと基地の外の岩国の人たちとの共闘を目指す場」として作られた（中川、1998：192-193）。

このようにジャテックの運動の特徴は、基地のフェンスを越えて米兵に呼びかけ、出会いをつくり、そこから共同の／別々の運動をつくっていった点であった。方針転換後、最終的にジャテックのもとに4名の脱走兵が匿われることになり、このうちの2名は基地から脱走してから一年以上になっていた（本野、1998a：150）。脱走兵を匿う

ことは出口なしの「地獄の様相」(藤枝、1998:162)となったと回想されてもいる。この4名の脱走ルートの開拓に向けた地道な努力は同時に行われ、国家の援助によらずに、ヨーロッパの抵抗運動との出会いと経験の引継ぎを受け、独自に脱走ルートを開拓、パスポートの偽造などの非法手段で2名の国外脱出に独力で成功している(高橋、2007b)。「国家が専一的に管理する国境を民衆の力で越えた」経験であった(高橋、2007b:244)。

3. 越境の経験と米兵との連帯

これらの運動の中で、ジャテックの活動に参加した人々は脱走兵や反戦米兵との出会いをどのように受け止め、共鳴していたのだろうか。1950年代を最盛期とする、「ヤンキーゴーホーム」をスローガンとした反米ナショナリズムの思想が根深い反米軍基地運動をふまえながらも、フェンスと国境を越境する認識と実践はどのように獲得されていったのだろうか。越境の経験について運動に参加した人々の声を拾いながら検討しよう。

3-1 「戦争」の実感と運動の歓び

ジャテックの運動に参加した人々は、生身の米兵との出会いを重ねていった。その出会いがさまざまな場で印象的に語られている。

脱走兵エドウィン・アーネットが私の家の玄関に姿を見せたとき、彼の何かに打ちのめされたような暗い眼差しが、私をとらえた。私にとっては、それがはじめての《アメリカ体験》であり、《ベトナム体験》だったのだ。(深見、1974=1970:326-327)

私にとっては、脱走兵と出会うことによって、自分がとらえていたベトナム戦争・日米安保条約というものが、まさしく具体的に、生きた現実として、脱走兵と生活を共にすることの中からうかびあがってきたといつてよい。(匿名、1969:155)

私たちにとって脱走兵たちとは、日常のなかの非日常、日々の暮らしのなかに突きつけられたくベトナム戦争>であった。彼らと会い、信じられないような悲惨な話を聞かされた後で一步戸外に出ると、そこには一見平和な、高度経済成長を謳歌する人びとの生活があった。私たちはこのふたつの現実の両側を往来しながら、何とかして日本人のこのまやかに満ちた平和に、私たちだけが知っているもうひとつの現実を突きつけ、私たちもまたベトナム戦争の当事者であることを知らせたい、と痛切に感じていたのである。(本野、1998:126)

ジャテックに参加した人々にとって、脱走兵との出会いはベトナム戦争をリアルに実感し、目の前につきつけられる経験であった。脱走米兵や反戦運動を基地の中で展開する米兵に出会い、支援することは、「ベトナム戦争に反対する」という実感や具体的な働きかけへの達成感をともなう経験であった。

ほとんどのアメリカ兵が受け取ってくれる。拒否するのは1/3ぐらい。通りすがりの日本人が、興味ありげにちらっとぼくたちを見る。クチャクチャと手でまるめたり、無造作にどこかにつっこんでしまう人もいるが、かなりの人が真剣に読んでいるようす。立ち止まったり、歩きながら、仲間としゃべって、何くわぬ顔をしてポケットの奥にしまい込む。たぶんあとで、1人になった時よく読むのだろう。みんな僕たちぐらいの年齢だ。どこか、気がたっている様子がある。[...] みんなアメリカ兵へのはじめてのピラまきが無事おわって、いささか興奮の面持ち(ベ平連、1974a:37)。

何気ない米兵へのピラ配りの報告の記録ではあるが、米兵と日本人にとって、立ち止まる、目をあわす、言葉を交わす、仲間と話し合う、といった1つ1つの営みが、実は新しい出会いであった。この文章からは、出会いとコミュニケーションの場を作ったことへの興奮、緊張、喜びが行間に読み取れるのではないだろうか。また、コミュ

ニケーションとは、言葉を交わすことだけではなく、反応やしぐさ、表情を読み取る行為そのものであることも示唆している点で重要な記録である。

ぼく（ら）は、岩国の町が好きだというより、米軍基地のある町で自分を見てみたかったのである。ベトナム戦争に反対する、という手ざわり。あんな大きな国が小さな国に勝手に理屈を並べ、爆弾を落としていることは許せない。大国に身をするよせている日本政府への腹立たしきであり、「おい、お前、なにやっているんだ」という自分への問いかけだった、それはときめきであった。（中川、1998：189）

リアルに実感したベトナム戦争は喜びとともに、「おい、お前、なにやっているんだ」という自分への問いかけとなって返ってくる。すなわち、ベトナム戦争と自分自身とのつながりを実感を伴って考えなおす契機であったのである。「ベトナム戦争は、もはや遠い河の向うの戦争ではなく、この日本ですべての日本人を何がしかそれにかかわらせる戦争」として受け止められ、「60年当時には、守られるべきものだった日常的な市民生活が今では否定されるべきもの」（鶴見、1969：51）へと運動経験の中で転換されていくのである。

3-2 加害者・被害者論から、米兵との連帯へ

小田実による加害者・被害者論がベ平連の運動と思想に大きな影響を与えたことは前述した。この「自らの加害者性と被害者性の両方をとらえる」ことを通じて戦争を根本的に問う、という思想はジャテックの運動においても大きな影響を与えた。それは、米兵との連帯を可能とする思想であった。生身の米兵との出会いから、連帯の志向性はどのようにしてつくられていったのだろうか。

たとえば、ジャテックを通じて脱走兵を匿ったと思われる深見進介は、米兵と出会う中で、これまでベトナム戦争に反対してきた自分がいかに安全な場にいたのか、ということ突きつけられたという。

個人としての米兵は、[...] ベトナム戦争では、ベトナム人民に対する加害者であると同時に、体制によって自由に生きる権利、ものを考える権利をおびやかされ、あるいは全く奪われているという意味で被害者である。そして重要なことは、米兵たちを将軍・将校たちと一緒に扱って、"帝国主義の手先"として敵視するのではなく、1人の人間としての彼らの要求が彼らを支配しているシステム＝暴力装置としての軍隊と、いかに矛盾するかを問題にすることなのだ。（深見、1970：330）

深見は、米兵をベトナム戦争における一方的な加害者とだけみ捉えるのではなく、米兵が多くを奪われながら、国家の暴力装置＝軍隊によって戦地に運ばれ、殺人を強いられている、という被害者性にも目を向けている。軍隊は、圧倒的な暴力装置としてベトナム人を殺し続けるだけでなく、兵士1人1人を殺人者へと仕立て上げていることを発見したのだ。たとえば、ジャテックの支援で脱走に成功したテリー・ホイットモアの声明文は殺人を強いられたこと、その行為を問い、考える余裕さえなかったことなど、軍隊内部の様子を明らかにしている。

海兵隊の訓練は、実にきびしいものでした。明けても暮れても、“殺せ”という言葉が、ひっきりなしに頭の中でひびきました。[...] 6か月もの長期にわたって、私はベトナムのジャングルや丘で戦いました。この間、私は行く先ざきで、ありとあらゆるものを殺し、破壊し、焼きはらったということを認めないわけにはいきません。[...] 若い兵隊たちは、血に飢えた獣の群にかえられていました。考える時間などありませんでした。（ホイットモア、1969：218-219）

加害者と被害者の双方を生きる、というとらえ方が脱走兵支援運動や米軍解体運動をつくり、参加していった人々の米兵への呼びかけを生み出していったといえる。ジャテックの活動に参加した人々の多くは、米兵に対して「ヤンキー・ゴー・ホーム」と呼びかけるのではなく、反戦のための行動を共に行なう連帯の対象として米兵を捉えたのである（深見、1970：330）。深見は、米兵への反戦の呼びかけをしようとした時、「私たちがとりかかったこの

仕事には、お手本というものがなかった」ことに驚いたと述べている（深見、1970：330）。このことは、それまでの反戦運動や反基地運動に顕著であった反米ナショナリズムの性格の強い運動とは異質で新しい思想／運動——米兵への連帯＝越境——が生まれていたことを示している。

3-3 「フェンス」を越えることと「隙間」を創ること

米兵との連帯を問題意識として持ち始めたとき、そこにはフェンスの存在が際立つことになる。フェンスを越える＝越境する運動とは、フェンスが規定する関係性をとらえかえし、新たな関係性をつくることであった。

安川「外から内、内から外という視点の交錯があるわけで、これは一人の脱走兵のいていた“あなた方を取り囲んでいる有刺鉄線は、ただ反戦デモ隊を排除するためにだけあるのではなく、あなた方を閉じこめておくためにもあるのだ”という言葉にもっともよくあらわされています。」（清水・古山・和田、1970：205）

フェンスは、連帯可能な日本の運動と米兵とを分断し、管理する境界線であった。越境とは、この管理と分断の境界線を具体的な運動のレベルで、また思想的なレベルにおいても越えていき、連帯を可能とする場を作る運動である。

しかし、フェンスの向こう側に向けた働きかけには、せめぎ合いがともなった。具体的には米兵からの挑発や遮断や暴力であった⁸。たとえば、朝霞反戦放送局の現場では、米兵からの挑発に合うこともあった。

「そうよ、戦争大好きさ。ベトナム人、あいつら糞つたれ、殺してあたりまえよ。」

大声でわめき散らす白人兵、うしろには応援団らしき7、8人の白人兵、ときどき声を合わせる。[…]「入ってきやがれ」と何度も叫ぶ。けんかという「表へ出ろ」と同じ調子。（清水、1970a：295）

挑発した米兵はライフル掃射のまねをしていたという（清水、1970b：313）。この時の米兵にとって、日本人はベトナム人同様に「殺してあたりまえ」の不快な存在として眼の前に立っていたのだろう。

その一方で、放送を聞くことを阻止しようとする将校とMPに対して、兵士が坐り込みで抵抗し、その抵抗に反戦放送局側が応援のシュプレヒコールを行う、という出来事も起こっている。

白人1名、黒人2名、金網に寄る。

——黒人 [の運動について] の [放送を]、ぜひやってくれ——

——放送ずっとつづけてくれ——

——おれたちはやるぞ！——

口々にこういい、興奮したみんなと握手。[…]

階級は不明だが、将校が偉そうに説得を開始。病舎に入りかけた兵士のうちのひとり、黒い車で連行される。その間ひとりが戸口に座りこむ。完全な坐りこみ行動、「断じて動かぬ」——ウィ・シャル・ノット・ビー・ムーブド——というアメリカの労働歌を思いだす。もうひとりが坐りこみに加わる。われわれは拍手。激励、将校・MPへの抗議をつづける。（清水、1970a：295）

このような経験をした清水知久は、反戦放送が、放送を行う人間に露骨に敵対する兵士たちと、放送に連帯の意志を明確な行動で示す兵士たちとに亀裂を広げていったように感じたという（清水、1970a）。この経験は、反戦放送で呼びかける、反戦放送を聞く、というフェンスを挟んで集まった人々の営みが、軍隊内のせめぎ合いを顕在化させることにつながったことを示している。平穏無事に戦争の遂行を目指したいMP・将校・兵士にとって、基地内のコンフリクトの顕在化は危機であり、それゆえに管理の対象となる。逆に、放送をする活動家（日本人だけでなく、外国人も参加していた）にとっては、安全な場所からベトナム反戦を唱えることは不可能になり、米兵、将校、MP、そして時に日本の警察とのコンフリクトや暴力と向き合いながら、米兵とコミュニケーションを取り、戦争と

軍隊に反対する言葉・営みを絶えず練り直すような試みであった。このような経験の積みかさねは、フェンスの向こう側に呼びかけるという越境する行為が、戦争と直結し緊張感を生み出したことを示している。このようなフェンスを越える経験は、脱走兵と密会し匿う場や、基地のフェンス越しに反戦放送を流し、米兵が聞く場など、時と場所を限定し、移動し続けながら、生成される空間をつくっていく。それは管理と分断に抗って、反戦の共同行動をつくる行為であった。

当時、京都の学生でジャテックの活動に参加していた塩沢由典は、フェンスを越えてやりとりされるコミュニケーションがつくる空間を、国家によって管理される空間に対置されるものとして、「私たちが住みうる」充実した空間＝管理の「隙間」と呼んだ（塩沢、1968：179）。

こういう隙間を、たえず無意識的に作り出している民衆の行動について考えてみたい。「イントレピッドの4人」やその後の脱走兵も、やはり同じような隙間を通して、日本を抜け出したと思うんです。それは権力にとって空白の空間だろうと思われまます。しかしそれは私たちにとっては1つの充実した空間、私たちが住みうる空間だと思うんです。（塩沢、1968：179）

国家によって管理されない「隙間」をよりいっそう掘げ、フェンスをまたぐことで、戦争を止める活動が展開できるのだ、という主張である。反戦放送局によって創られたコミュニケーションの空間はまさにそのようなものであった。基地内のコンフリクトを顕在化させながら、抵抗を試みる兵士を生み出し、勇気づけ、そして、放送を流す側と聞く側との間で、国家の意のままにならぬ抵抗運動が練り直されていったと言える。

すなわち、越境する運動は、MPや将校、日本の警察による管理の網の目をかいくぐって、フェンスの「こちら」と「あちら」が共同で「隙間」、「権力にとって空白の空間」、「私たちが住みうる空間」を瞬間的につくる試みであった。

4. 国家を越える＝〈脱走〉する主体へ

最後に、「[市民]の国境を越えた連携によって国家権力・国家原理を超えることが目論まれていた」（道場、2005：448）点に立ち返ってみよう。ジャテックに参加した人々はどうのように国家権力・国家原理を超え／超えていったのだろうか。また、人々はどうのような主体性の変容を生きたのか。

「イントレピッド4人」の会の世話人の1人である海老坂武は、脱走兵の声明文が、自由と民主主義という「[あるべき理想のアメリカ]の名による[現にある現実のアメリカ]の告発」という論理を取っている点、また、脱走兵自身が語った「自分は売国奴、共産主義者、個人主義でこりかたまっている人間と呼ばれるかもしれない。しかし自分は、何らかの主義主張、イデオロギーに則って行動したのではない。あくまでも自分1個の決定で脱走を決意した」という意志にその特徴を見出している（海老坂、1969：36-38）。脱走兵は国家理念を掲げながら、脱走を果たすという両義性を生きていた。国家理念を掲げながら脱走する様に、米兵への「アメリカンイデオロギーの強大な支配力」（海老坂、1969：38）を読み解くのである。そして、脱走する際には、この内面化された国家イデオロギーとの格闘——「おそらくは盲目の、辛い闘い」（海老坂、1969：38）——があったのだろうと分析する（海老坂、1969：36-38）。これは国家理念である憲法を、脱走と反戦を支える原理としてとらえかす戦略でもあった（道場、2005：467）

米兵は、国家のイデオロギーを内面化し、主体化している。しかしながら、海老坂は脱走米兵・テリー・ホイットモアの声明文の中で言及されている「殺せ」という国家からの命令に注目し、主体化は同時に自己を抑圧し、他者化させていくメカニズムでもあると述べる。

「殺せ」という言葉はおそらく、私たちの意識が、みずからの責任において発しえない言葉の1つである。それはいわゆる他者化された言葉でしかありえないだろう。[...] ホイットモアにおいて [...] それは「国家」の言葉であった。（海老坂、1969：38-39）

脱走という越境する営みは、「集団の体験から自己の体験を断ち切り、国家イデオロギーによって他者化された言語を自分の思考から排除していく」営みとして読み替えられる（海老坂、1969：41）。海老坂の分析した脱走兵が国家のイデオロギーや暴力を感受し、そこから離脱するという経験は、運動レベルでも人々が経験したことであった。たとえば、次の証言は、脱走兵を匿っていた学生・浅井博二が目にした脱走兵の「震え」に関するものである。

彼らにはもう何もない、全部捨てちゃったんだ、これから先どうなるかも分からないし、一步も家の外に出られないんだ、ということ。そう思ったら、やけに国家というものの存在が具体的に感じられたんです。大学ではわあわあ走り回って、国家とは、大学とは何ぞやみたいないっぱしの理屈をこねたりしましたが、本当は具体的にはよう分らなかったですな。彼が震えているのを見て、それを初めて肌で感じたんです。（本野、1998：451）

浅井は、「震え」を通じて国家の存在がいかにそれぞれの脱走兵に対して強力であるかを感じ取り、国家との格闘の過程を感受しているのである。そして、理屈で分かった気になっていた国家なるものが、「具体的に感じられたんです」という言葉からは、「震え」が浅井本人に転移するような形で、自分自身も国家と向き合っている、あるいは向き合わざるを得ないことを実感したとも解釈できるだろう。

脱走兵や反戦米兵を支援する人々が、米兵と出会うと響き合う部分は、戦争と不可分な形で進められる国家による抑圧と他者化のメカニズムから自らを切断・離脱させるという思想であった。運動に取り組んでいた「Cさん」は、ある座談会で、脱走兵を支援する時に「自分が脱走している」気がすると言っている。

脱走兵を扱った時、自分も脱走兵になっているんだという気がするんですよ。[...] 脱走兵というのは、安全な思想を持ち、安全な生活をしている人がお金を出して、「ニューヨーク・タイムズ」に反戦広告を出すというのとはややちがって、自分自身が脱走している。つまり、その時は、現世的秩序から時間的・空間的、あるいは政治的に出ているんだ。その時、非常に孤独感と勝利感と猜疑感とがないまぜになる [...]。いわば「脱走の人間」というのが居てね [...]（小田・鈴木・鶴見、1969：167-168）

脱走兵や反戦米兵を支援した人々は、国家によって「他者化された自分」という主体に気付き、異なる主体性を取り戻していくような経験をしていたといえるのではないか。すなわち、自分自身が国家のイデオロギーにより主体化していることを意識化し、相対化し、異なる生へと逸脱していく——物理的な脱走ではなく、思想や主体性のレベルでの逸脱という意味での〈脱走〉へと向かう——主体の変容過程であった⁹。

ジャテックという場で生成した脱走兵支援運動・米軍解体運動の経験は、フェンスを越えて、米兵と連帯する中で、戦争を遂行する国家が自らの主体と密接不可分であることを可視化したと言える。その運動経験の中で、人々は国家イデオロギーにまるごと組み込まれている生から〈脱走〉する自らの主体性の変化に気付くに至ったといえるのではないだろうか。

5. むすびにかえて

本稿では、世界各地の反戦運動や「活動家」そして米兵と共鳴しつつ展開された、日本国内の米軍基地のフェンスを越えるジャテックの脱走兵支援運動の米軍解体運動を分析した。日本人と脱走兵や米兵、海外の活動家との生身の出会いを通じて、戦争を実感し、歓びをともなった連帯の経験があったこと、人々が国家に管理されつくされない「隙間」という運動空間とコミュニケーションを創る中で、戦争を生み出す国家と自らとの関係性を捉え返し、〈脱走〉する主体へと生成していったことを見てきた。

このような越境する運動は、それぞれの立ち位置や被害者性・加害者性の違いによって、ややもすると「非対称性を幾重にも刻印されながらバラバラに分極化して」いってしまうような状況の中で、「いかに国家や軍隊というものに対して根源的に抗っていくのか」（土井、2006：182-183）という問いを人々が共有していく経験であったとい

える。自らの戦争との関係性を考えきる中で、「「基地は出ていけ」でも米兵を殲滅することでもない、理念ではなく社会関係としての平和や人間的な和解を能動的につくりあげていく」（崎山、2003：278）越境する反戦運動の試みが、ジャテックの運動にはあったのである。

【注】

- 1 ベ平連はもともと「ベトナムに平和を！市民文化団体連合」という呼び名であった。ベ平連は組織ではなく、運動体である。綱領がなく、その趣旨に賛同するものは1人であってもベ平連になることができ、運動の興隆期には日本全国各地に数百にもものぼるベ平連が活動を行っていた。本稿でベ平連に言及する場合、多種多様なベ平連のうち『ベ平連ニュース』（ベ平連、1993）や『資料「ベ平連」運動（上巻・中巻・下巻）』（「ベトナムに平和を！」市民連合、1974a；1974b；1974c）など、東京を中心とした活動の記録を参照している。なお、各地域での、ベ平連の活動に焦点を当てたものとしては平井一臣の研究がある（平井、2005）。また、ジャテック（JATEC：Japan Technical Committee for Assistance to U. S. Anti-War Deserters = 反戦脱走米兵援助日本技術委員会）も、固定的・永続的な組織ではなく、市民のゆるやかなネットワークにもとづいていた（高橋、2007b：257）。日本のいくつかの地域でゆるやかに独立したジャテックが生まれるなど、日本全国に広がりのある運動を展開していた。よって、ジャテックについても、多種多様な活動・人々のうち、『とくに脱走兵のいた時代』（関谷・坂元、1998）や『脱走兵通信』と『ジャテック通信』（ベ平連、1993）、『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……』（高橋、2007b）などの記録と筆者による聞き取り調査（高橋、2007a）の結果を参照している。しかし、ジャテックはその運動の性格上、匿名かつ非公然に活動を行っていたため、その全容を運動の中心人物でさえ、把握していない。
- 2 一次資料として、ベ平連『ベ平連ニュース縮刷版・脱走兵通信・ジャテック通信』（ベ平連、1993）、『ベトナムに平和を！』市民連合・編『資料「ベ平連」運動（上巻・中巻・下巻）』（「ベトナムに平和を！」市民連合、1974a；1974b；1974c）、鶴見良行『ベ平連（鶴見良行著作集 2）』（鶴見、2002）、などがある。また、当事者の回想や総括の主なものとして、小田実『「ベ平連」・回顧録でない回顧』（小田、1995）、吉川勇一『市民運動の宿題』（吉川、1991）、関谷滋・坂元良江編『とくに脱走兵がいた時代』（関谷・坂元、1998）、高橋武智『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……』（高橋、2007b）などがある。まだ運動が行われていた頃のものとしては、小田実『ベ平連』（小田、1969a）、小田実・鈴木道彦・鶴見俊輔『脱走兵の思想』（小田・鈴木・鶴見、1969）、小中陽太郎『私のなかのベトナム戦争』（小中、1973）、清水知久・古山洋三・和田春樹『米国軍隊は解体する』（清水・古山・和田、1970）などがある。その他の資料については「旧「ベ平連」運動の情報ページ」HPの「ベ平連関連参考文献・資料」（URL：<http://www.jca.apc.org/beheiren/bunken.html>）が詳しい。
- 3 ベ平連の「市民運動」としての側面に着目し、1960年安保闘争を契機とする市民運動の系譜の中にベ平連の運動を位置づけて考察した淵邊朋広による論文（淵邊、2003）、「「戦後」におけるナショナリズムや「公」にかんする言説を検証し、その変遷過程を明らかにする」（小熊、2002：11）ことを目的とし、分析対象である「戦争体験をもつ「戦後知識人」としての小田実と鶴見俊輔の思想・言説を通じてベ平連の考察を行った小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞』（小熊、2002）、そして、戦後日本の「反戦平和」の「行動史」という視点から、「反戦平和」運動・思想における大きなパラダイム・チェンジを提起・実践したものとして、ベ平連の運動と思想を検討・紹介した道場親信『占領と平和』（道場、2005）などが挙げられる。また、上記のものが東京中心の視点に偏らざるを得ないこと、また、ベ平連運動が東京以外の地域でも展開された点に着目して、ベ平連の地域的展開を考察した平井一臣の論文（平井、2005）がある。
- 4 論文等からの引用箇所では、[...]は引用者（大野光明）による省略を指し、[]内の文字は引用者による補足である。また、年月日等の漢数字はすべてアラビア数字に改めた。ただし、固有名に漢数字が使われている場合はそのままにしている。
- 5 活動の時期区分はジャテック当事者のまとめによるものによっている（関谷・坂元、1998）。なお、本稿でいう「第2期」の中心人物であった高橋武智は3期に運動を区分している（高橋、2007b）。
- 6 ジャテックとベ平連との関係の整理をここでしておく。ジャテックは前述のとおりベ平連の活動の中から、「イントレピッド4人」の会と兄弟のようにして生まれた脱走兵支援のためのネットワークである。活動開始当初はベ平連の主要な人物と、密接な関係を保持していたと言える。しかし、ジャテックの活動が秘密裏に行われる性格であったこと、また米軍解体運動などの独自の運動が展開されたことから、ベ平連とはゆるやかな連携へと移行していったようである。そのため、本稿において、ジャテックは徐々に独立した運動体へと移行したと考える。しかし、ベ平連はさまざまな活動や団体や市民をゆるやかに包含する場やネットワークであり、ジャテックに参加した人々はベ平連とも連携していたことを十分考慮したい。
- 7 次のような印象的なエピソードが紹介されている。
「かれらをかくまっているある家庭に私は行ったが、そこでは英語もなにもしゃべれない老婆がつけものを切ってアメリカ兵に食わしていた。どこかのホテルにでも泊めれば、すぐつかまってしまうのだ。そういう「手作り」の素朴な運動が広がっている。それは、農民、詩人、学者、あるいは「かれらはどこへ行ったかわからない」と報道している当のマスコミの人の中にもいるかもしれない。それはもうおおよぶつかない大きな勢力で、かれらがかくまわれているのである。」（小田・鈴木・鶴見、1969：195）
- 8 また、米兵からの挑発により、人種、民族、ジェンダーをめぐる軋轢が複合的に現れることもあった。たとえば和泉二郎「「反戦」脱

走米兵援助のはずが……——《鶴田》と呼ばれた男のこと》(和泉、1998)に掲載されている神谷康子氏の日記を参照されたい。

- 9 ベトナム戦争時に脱走に成功した元兵士たちのその後の生活はいまだに苦勞の多いことが報告されている。例えばジャテックに参加していた坂元良江は脱走兵との再会を果たした。元兵士は未だに自由を回復しきれていなかったり、自分の子供にさえ脱走兵であったことを語れない人生を送っていることもあった。再会を振り返って、坂元は「彼らの戦後は終わっていない」と現在の生活を受けとめている(坂元、1998:353)。このように脱走兵にとっては国家からの脱走は終えられない現実があることも指摘しておきたい。

【参考文献】

- ・和泉二郎、1998「“反戦” 脱走米兵援助のはずが……——《鶴田》と呼ばれた男のこと」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・井上澄夫、1968「6・15をのりこえて新しい力を生み出そう！」ベ平連、1993『ベ平連ニュース縮刷版・脱走兵通信・ジャテック通信』。(初出『ベ平連ニュース』第37号 [1968年10月1日])
- ・S、1968「事務局だより」ベ平連、1993『ベ平連ニュース縮刷版・脱走兵通信・ジャテック通信』。(初出『ベ平連ニュース』第31号 [1968年4月1日])
- ・海老坂武、1969「脱走兵支援運動の主体的根拠——脱走兵への共鳴の質を問う」小田実・鈴木道彦・鶴見俊輔、1969『脱走兵の思想』太平出版社。
- ・「大泉市民の集い」30年の会編、1998『大泉市民の集いニュース 復刻版』。
- ・小熊英二、2002『<民主>と<愛国> 戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
- ・小田実、1966=1974「平和への具体的提言——日米市民会議での冒頭演説」「ベトナムに平和を！」市民連合編『資料「ベ平連」運動(上巻 1965-1968)』1974、河出書房新社。
- ・小田実編、1969a『ベ平連』三一書房。
- ・小田実、1969b「69年のベ平連 小田実氏にインタビュー」ベ平連、1993『ベ平連ニュース縮刷版・脱走兵通信・ジャテック通信』。(初出『ベ平連ニュース』第40号 [1969年1月1日])
- ・——、1969c「こちらからむこうへ突き抜ける——等身大の行為としての脱走」小田実・鈴木道彦・鶴見俊輔、1969『脱走兵の思想』太平出版社。
- ・——、1995『「ベ平連」・回顧録でない回顧』第三書館。
- ・小田実・鈴木道彦・鶴見俊輔、1969『脱走兵の思想』太平出版社。
- ・小中陽太郎、1968「脱走兵援助活動について」小田実・鶴見俊輔編『反戦と変革』1968、学芸書房。
- ・——、1973『私のなかのベトナム戦争』サンケイ新聞社。
- ・古山、1968「「全国懇談会」開かれる——活発な経験交流——」ベ平連、1993『ベ平連ニュース縮刷版・脱走兵通信・ジャテック通信』。(初出『ベ平連ニュース』第30号 [1968年3月1日])。
- ・古山洋三、1970「脱走」清水知久・古山洋三・和田春樹編著、1970『米国軍隊は解体する』三一書房。
- ・坂元良江、1998「ニューヨークに神田ことウィリーを訪ねて」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・崎山政毅、2003「いくつもの「故郷」へ/いくつもの「故郷」から」西成彦・原毅彦編『複数の沖繩』人文書院、2003。
- ・塩沢由典、1968「金東希と政治亡命」小田実・鶴見俊輔編、1968『反戦と変革』学芸書房。
- ・清水知久・古山洋三・和田春樹(編著)、1970『米国軍隊は解体する』三一書房。
- ・清水知久、1970a「亀裂と連帯」、「大泉市民の集い」30年の会編、1998『大泉市民の集いニュース 復刻版』。(初出『大泉市民の集いニュース』第27号 [1970年4月2日])
- ・——、1970b「こちらRCMG……大泉反戦放送局です」「ベトナムに平和を！」市民連合・編、1974『資料「ベ平連」運動 中巻 1969-1970』河出書房新社。(初出『週刊アンボ』1970年4月20日号)
- ・関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・関谷滋、1998「イントレピッドの四人とジャテックの誕生」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・高橋武智、1998「第二期がたちあがるまで」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・——、2007a「高橋武智氏 インタビュー記録」(聞き手：大野光明。2007年1月7日)。
- ・——、2007b『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……』作品社。
- ・鶴見良行、1967「日本国民としての断念——「国家」の克服をいかに平和運動へ結集するか」鶴見良行、2002『ベ平連(鶴見良行著作集 2)』みすず書房。(初出『潮』1967年秋季号)
- ・——、1969「一九七〇年とベ平連——統一についての私的覚え書——」小田実編、1969『ベ平連』三一書房。
- ・——、2002『ベ平連(鶴見良行著作集 2)』みすず書房。

- ・土井智義「[県外移設]論を批判的に考える」『世界』2006年4月号、岩波書店。
- ・匿名、1969「エンタープライズ—脱走兵—70年安保」小田実・鈴木道彦・鶴見俊輔、1969『脱走兵の思想』太平出版社。
- ・中川六平、1998「[“そういう時代”のほびっと]」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・東陽一、1979『午後4時の映画の本』幻燈社。
- ・平井一臣、2005「戦後社会運動のなかのベ平連」『法政研究』第71巻第4号。
- ・深見進介、1970「脱走援助から米兵との共闘へ」「ベトナムに平和を！」市民連合・編『資料「ベ平連」運動 中巻1969-1970』1974、河出書房新社。（初出『朝日ジャーナル』1970年5月10日号）
- ・藤枝滯子、1970「反戦GI新聞——兵士の、兵士による、兵士のための紙の弾丸——」清水知久・古山洋三・和田春樹編著、1970『米国軍隊は解体する』三一書房。
- ・———、1998「怪僧ラスプーチンへのオマージュ」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・淵邊朋広、2003「ベ平連運動研究序説——市民運動の登場と展開——」（旧ベ平連HP <http://www.jcs.apc.org/beheiren/Fuchibe-Shuusi-Ronbun.htm> アクセス：2006年6月9日）
- ・ベ平連、1993『ベ平連ニュース縮刷版・脱走兵通信・ジャテック通信』。
- ・「ベトナムに平和を！」市民連合・編、1974a『資料「ベ平連」運動 上巻』河出書房新社。
- ・———、1974b『資料「ベ平連」運動 中巻』河出書房新社。
- ・———、1974c『資料「ベ平連」運動 下巻』河出書房新社。
- ・ホイットモア・テリー、1969「脱走兵名簿、およびその声明」小田実・鈴木道彦・鶴見俊輔、1969『脱走兵の思想』太平出版社。
- ・———、吉川勇一・訳、1993『兄弟よ 俺はもう帰らない』第三書館。
- ・本野義雄、1998a「[方針転換]と米軍解体運動」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・———、1998b「記憶の海の底から」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・———、1998c「アテンダント・グループの学生たち」関谷滋・坂元良江編、1998『となりに脱走兵がいた時代』思想の科学社。
- ・道場親信、2005『占領と平和：<戦後>という経験』青土社。
- ・吉岡忍・鶴見俊輔、2007『脱走の話』編集グループSURE。
- ・吉川勇一、1969「ベ平連とは何か」小田実編『ベ平連』三一書房。
- ・———、1991『市民運動の宿題』思想の科学社。
- ・吉見俊哉、2007『親米と反米』岩波書店。

(謝辞)

本稿をまとめるにあたって、多くの方々にご指導・ご支援いただきました。ジャテック第2期に中心的な役割を果たされた高橋武智氏には、貴重なインタビューの機会をいただきました。また、〈社会運動〉研究会のメンバーとの3年間にわたる意見交換から有益な知見を得ることができました。この場を借りて、感謝申し上げます。ありがとうございました。

Transversal Social Movements and Deserting Subjects: JATEC's Assistance to Deserters and the U.S. Army Destruction Movement

ONO Mitsuaki

Abstract:

This paper focuses on JATEC (Japan Technical Committee for Assistance to U.S. Anti-War Deserters), which assisted deserters and carried out “U.S. army destruction” movements in Japan in the Vietnam War era. JATEC was organized by a wide network of people in Japan who opposed the Vietnam War. This movement, consisting of a wide range of anti-Vietnam war groups, has been explained in some studies as an attempt to transcend nationalism by making fruitful solidarity with people of the U.S.A. to stop the war. In this paper, I consider this understanding of JATEC as a transversal movement from the viewpoint of the network's continuous face-to-face communications with U.S. army personnel.

I explain the background and contents of the JATEC movement, the reasons why JATEC participants supported desertions and resistance by U.S. soldiers, and the philosophy of the transversal anti-war movements that developed from the face-to-face communications between the participants and the U.S. army deserters and rebels. Finally, I consider how the participants experienced their activities, which pushed back borderlines such as the fences of U.S. bases and nationalities, and how the subjects of the participants were changed by these activities.

Keywords: JATEC, transversality, Vietnam War, desertion, U.S. Army Destruction Movements

